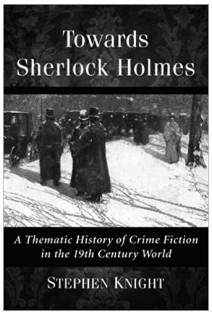
書　評



Stephen Knight, *Towards Sherlock Holmes: A Thematic History of Crime Fiction in the 19th Century World*
(Jefferson: McFarland, 2017)

南谷　奉良

著者のスティーヴン・ナイトは、今年2018年にもオーストラリアにおける200年に及ぶ犯罪小説史を上梓しているが、本書はその研究領域の広さを示すようにして、アメリカ、フランス、イギリス、オーストラリアの土壌が横断的に影響し合う初期の犯罪小説史を扱っている。リロイ・パネックのアプローチと似ているものの、[1] ナイトは “before” ではなく “towards” の運動性に従って、探偵ホームズが出現するまでの歴史的水脈を追跡する。「水脈」といったが、犯罪小説というジャンルの歴史を、複数の流れが分岐と合流を繰り返しながら織りなす巨大な河川とイメージすることは、実際本書を読み解く上でいくらか便宜的であるだろう。たとえばハワード・ヘイクラフトはその古典的な著書で、[2] ポーの「モルグ街の殺人」(“The Murders in the Rue Morgue,” 1841) から出発し、フランソワ・ヴィドックとエミール・ガボリオを経由、続けてウィルキー・コリンズやディケンズを通過することでドイルへと向かう探偵小説史の流れを提示しているが、これはまさしくHeather Worthingtonが指摘する、[3] 幾度も使い古されてきた筋道、“path from Vidocq through Poe and on to Conan Doyle” の代表例と言えるだろう。犯罪小説というより広範囲な射程を扱うナイトは、ポーを代表とするmainstreamの作家たちが他のマイナーな作家に割かれるべき紙幅を奪ってしまうことに対して批判的であり、むしろこれまで看過されてきた傍流や支流がいかにその巨大な河川の水量の一部を供給しているかを例証しようとしている。

本書は200頁あまりという小ぶりなヴォリュームの割には読み応えのある研究書に仕上がっているが、とりわけプレ＝ポー期のアメリカが犯罪文

学のジャンル形成に重要な貢献をしたことを論証する第1章は、過剰とも言える情報量をもつ。犯罪文学史ではおなじみのものも多く含まれるが、ゴシック小説の伝統を継承しながら、犯罪や探偵行為のモチーフを取り入れたチャールズ・ブロックデン・ブラウン、犯罪に対する恐怖と好奇へ大衆を手招いたアメリカ版『ニューゲイト・カレンダー』(*Newgate Calendar*)やそれに類する言説の存在、ウージェーヌ・シューの新聞連載小説『パリの秘密』(*Les Mystères de Paris*, 1842–43)を模倣する諸都市の『秘密』シリーズ、ポーに構成的ヒントを与えた可能性があるいくつかの(疑似探偵としての)弁護士物語、ジェイムズ・フェニモア・クーパーの『モヒカン族の最後』(*The Last of the Mohicans*, 1826)がフランスの作家たちをして都市を「脅威を孕んだ、未踏の荒れ地」として再=想像させた影響、そうしたフランスへの影響がアメリカに再輸入される形で、『リーヴェンワース事件』(*The Leavenworth Case*, 1878)を代表作とするアンナ・キャサリン・グリーンがエミール・ガボリオやフォルチュネ・デュ・ボアゴベイといった大衆小説家の著作から多くを吸収し、以降探偵小説のなかで多く使用されるモチーフや道具立てを発明した点……等々、多くの事柄が論じられる。いくらか情報過多の章であるのだが、ポーという一級河川の外に存在する傍流や支流の存在を読者に瞥見させる点では成功しているのかもしれない。また多くは後続する章のなかで反復して扱われることになる。

続く第二章では、ポーの物語の舞台設定であるだけでなく、ホームズの血統にもその地が関係していることを指摘した上で、19世紀犯罪小説史を流れるフランスの血脈——犯罪捜査史の「親玉」ヴィドック、シューにならったポール・フェヴァルの作品、またその秘書であり、探偵ルコックを生み出したエミール・ガボリオの革新性——が検討される。読者は各章の内容の合流地点をさまざまに知らされるが、本章のガボリオがクーパーに影響を受けていた点、グリーンがガボリオを読んでいた指摘によって、第1章と第2章の内容が合流することだろう。またファーガソン・ヒュームやホームズのガボリオへの言及は第6・7章の議論で回収されることになる。

第3章は、英国における階級や階級移動の主題を扱っている。そのジャンルの礎を築いた『ケイレブ・ウィリアムズ』(*Things as They Are; or The Adventures of Caleb Williams*, 1794)に見られるように(72)、初期の犯罪文学

は、長らく下層階級とジェントリ層という二極分化した階級構造に関心をもっていた。しかし1840年代以降、識字率の増加に伴う、従来とは異なる読者層（[R. S. Nealeの5階層分類にもとづく]ミドリング層や労働者階級A、および女性層）に向けた諸雑誌の登場、警察機構内での（小規模ではあったが）探偵課の創設とミドリング層を出自とする（犯罪を専門的見地から考察する）探偵たち、1860年代以降の“detective”をタイトルに冠した作品の増加や探偵行為を行う女性の登場などを通じて、犯罪文学が扱う階級はゆっくりと分化していき、世紀転換期の時点でようやく労働者階級より上の階級の人間が物語において犯罪者にも探偵にもなりえた。ホームズが三つの階級（ミドルクラス・ミドリングクラス・ワーキングクラス）間を、下調べ、変装、現場捜査等によって移動する探偵術は（96）、こうした変化を認識する上で確かに示唆的である。

第4章では探偵小説におけるジェンダー論であり、キャサリン・クロウの（最初の原題）*Susan Hopley, or Circumstantial Evidence*（1841）や、（Seeley Regesterによる*The Dead Letter* [1867]よりも早く出版された）Andrew Forresterによる*The Female Detective*（1864）から1890年代以降の数々の物語にかけて、つまりはヴィクトリア朝文学のなかで探偵的活躍を見せた女性たちが紹介される。「女性の探偵」という主題の川は歴史的にきわめてゆるやかな湾曲を見せるが、特に“New Woman”が盛んに言及される頃になってようやく大きな展開を見せるとナイトは指摘する。なかでも、男性中心社会のジェンダー化された期待に敢然と立ち向かい、意識的に男性に対峙してその意見に反駁する、キャサリン・ルイーザ・パーキスがつくりだした女性探偵“Lovelace Brooke”は高く評価され、“the most radically proto-feminist of the early women detectives”だと述べられている（116）。男性の探偵が支配的になりがちな批評史の光景のなかで本章の分析はきわめて重要であり、同主題に特化したLucy Sussexと合わせて読まれるべきであろう。[4]

第5章の内容を理解する上では、Worthington（esp. pp. 103–69）およびShpayer-Makov（2011）が扱う警察機構の発展と専門的な探偵が登場する歴史的経緯を事前に踏まえるのが簡便だろう。[5] 創設当時、下層階級の出身者からリクルートされる警察は、未だ十分な捜査権も与えられておらず、

リスペクトを受けるどころか軽蔑の対象ともなる、非英雄的な存在であった。同じ階級に属する読者にとっては相応の権威とはなりえず、また憧憬を抱く対象となっていた上流階級内部のドラマに立ち入るには不適当だとみなされていた（127）。しかしこうしたネガティブな見方も、およそ世紀の中頃を転換点として変化しはじめる。それはディケンズやコリンズ、メアリー・エリザベス・ブラッドンなどの主流作家たちがミステリーの形式を固めるなかで表面化し、警察の存在および捜査術は物語のなかで相対的に高いステータスを与えられるようになる。ナイトは特にブラッドンの小説が殺人事件の謎を解くことにフォーカスを当てる古典的な形式を用意したことを評価しているが（153–54）、この評価は、次章で扱われる犯罪小説における英国初のベストセラー本、ヒュームの『二輪馬車の謎』（*The Mystery of a Hansom Cab*, 1886）が爆発的に売れた理由を議論するための伏線にもなっている。

第6章は、オーストラリアに研究拠点をおく著者だけに、筆を揮った章となっている。植民地から読むに値する文学が生まれるはずもないという当時の予想に反して、1886年にメルボルンで、翌年ロンドンで発刊された（最初のホームズ物語『緋色の研究』（*A Study in Scarlet*）が出たのは、その数日後）『二輪馬車の謎』は、当時としては異例の売れ行きを誇った（161–62, 179）。ナイトは、その成功を複数の筋道から説明する。すなわち、ヒュームが19世紀に誕生したミステリーというジャンルの創始者たち（ガボリオやグリーン、ブラッドン、コリンズ）の構成やモチーフを借用・模倣したこと、ヴィクトリア朝的な3巻本の長さから脱却し、容易に舞台化できるような構成をもつ一巻本というモダンなフォーマットを用いたこと、ほぼ同時期にスタートを切るホームズ物語に見る展開の早さをもつこと、流刑地という伝統的な表象ではなく、（Donald Cameronから啓発されたであろう）メルボルンという資本と喧騒と流行が集中する「都会」という空間の魅力を引き出したこと、そして宣伝とマーケティング戦略が功を奏したこと…等々、その成功の理由を徹底して考察している。複数の筋道が互いに架橋されることがないため、その論の妥当性に若干の疑いが残る部分はあれど、『二輪馬車』に対してはジュリアン・シモンズが1ページほどの分量しか紙幅を割かなかったこと、[6] またヘイクラフトがかつて『二輪馬車』に与

えた “Scarcely readable to-day” や “freak book”（63）という形容を考えれば、ナイトが与える “the culmination of the broad-based 19th century tradition of mysteries”（177）は、同作の評価を抜本的に更新するための重要な賛辞になっていると言えるだろう。

終章において読者はようやく犯罪文学史という河川の大きな湾曲部にたどり着く。ここではドイル自身の帝国と植民地主義への態度の変化が扱われる。『シャーロック・ホームズの冒険』（*The Adventures of Sherlock Holmes*, 1892）から、（同シリーズに嫌気が指してその最後の短編でホームズを殺すまでの）『シャーロック・ホームズの回想』（*The Memoirs of Sherlock Holmes*, 1893）に収められた物語群には帝国主義の暴力と犯罪の主題がさまざまに噴出するが、ナイトによれば、それ以降のドイルは帝国主義への批判を弱め、むしろその支配を擁護するように踵を返す、という。しかし象徴にたよる拡大的な解釈に加え、主張が論拠に先行している点で、本章の議論は十分な説得力を備えるに至っていない。たとえばナイトはドイルの態度転換の証左としてボーア戦争を擁護した文章（1900）を引き合いに出すのだが（202）、実はそれよりも前のページで――すなわち帝国主義に批判的であったドイルの初期作品を検討するなかで――ナイトは1909年に出された、レオポルド二世のコンゴの私領化およびその比類なき非人道的な支配の実態を批判した文章にも触れている（191）。しかし、このときナイトは（本書にとってはきわめて魅惑的なはずの）“The Crime of the Congo” のタイトルとその出版年には言及しないのである。この省略にはドイルの方向転換という流れを維持するための我田引水の痕跡が明らかに見える。ドイルの政治的な態度についてはより多くの紙幅のなかで、より慎重な議論とともに検討される必要があるだろう。

最後になるが、本書には「最初の〇〇」や「初めて～した／された」、「初めて～を扱った」などの事柄を意味する、記念碑的な first をもつ記述（pp. 32, 34, 36, 37, 39, 41, 45, 46, 48, 49, 51, 56, 60, 61, 65, 67, 86, 99, 100, 104, 111, 113, 126, 140, 146, 154, 157, 168, 188）、あるいはそれに類する記述（「父」や「元祖」、「先駆者」、「画期的」; pp. 66, 75, 116, 133）が溢れている。上記には先行する他の批評家によって累乗されてきた認識も含めているが、本書の理解や引用に際して、またその真偽や妥当性を検証する上でも有用

であると考え、気づくかぎり、その言及があるページ数をここに記す。ナイト自身も意識的ではあろうが、これら多くの記念碑的な湧水池はあくまでも、未だ発掘されず、見逃されてきたものを探すためのfirstと考えるべきである。

注

1 LeRoy Lad Panek, *Before Sherlock Holmes: How Magazines and Newspapers Invented the Detective Story* (London: McFarland, 2011)

2 Howard Haycraft, *Murder for Pleasure: The Life and Times of the Detective Story* (New York: D. Appleton-Century, 1941)［『娯楽としての殺人――探偵小説・成長とその時代』林峻一郎訳、国書刊行会、1992年］

3 Heather Worthington, *The Rise of the Nineteenth Century in Early Popular Fiction* (London: Palgrave Macmillan, 2005)

4 Lucy Sussex, *Women Writers and Detectives in Nineteenth Century Crime Fiction: The Mothers of the Mystery Genre* (London: Palgrave Macmillan, 2010)

5 Haia Shpayer-Makov, *The Assent of the Detective: Police Sleuths in Victorian and Edwardian England* (Oxford: Oxford UP, 2011)

6 Julian Simons, *Bloody Murder: From the Detective Story to the Crime Novel: A History*. Harmondsworth: Penguin, 1974.［『ブラッディ・マーダー――探偵小説から犯罪小説への歴史』宇野利泰訳、新潮社、2003年］

――日本工業大学講師